



Title	もの言う動物：キャラクターとしての動物のイメージ
Author(s)	岩田, 美穂; 藤本, 真理子
Citation	語文. 2014, 103, p. 43-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

もの言う動物

——キャラクターとしての動物のイメージ——

一 はじめに

ある種の動物を擬人化する際、日本で育った日本語話者であれば特定の言語表現を用いて、特定のキャラクターを付与することがある。二〇一〇年に関西地方で放送された大阪ガスのCMには、洋服を着て擬人化されたさまざまな動物が登場した。動物が人間のことを話し、人間に物申すというストーリーであった。このCMの動物たちは、各動物のスタンダードなイメージをもったキャラクター化されている。例えば、犬（ドーベルマン）はスーツを着て、「人間にもいいところあると思うけど」のように人間を擁護する発言をし、ジャケツを着たゴリラは、「人間は実に不思議な生き物だ」「人間に猶予を与える」など、他の動物に比べて「知恵者」の立場にたった発言をする。ウサギはピンクのワンピースを着用した若い女性のキャラクターとして描かれ、また、

ブタはやや年配の女性の恰好をし、「人間は危険なイキモノだ。しかしユイイツ涙を流すイキモノだ。」と東北方言を想起させるイントネーションを持つ〈田舎ことば〉を話す。

これらの中で、互いの役を入れ替え、たとえばピンクのワンピースを犬が着て登場したり、ウサギがブタのように〈田舎ことば〉を話したりすると、ステレオタイプ（「こういうグループの動物は得てしてこういう性質を持っている」という知識（金水編二〇一四など参照）から離れていくと予測される。

そこで、特定の動物と特定のキャラクターとの結びつきがどれほどステレオタイプ化しているかを見るために、一八〜二二歳の日本人大学生七一人を対象に、次のアンケートを行った。質問で使用したセリフは金水（二〇〇三）を参考にした。結果は表一である。

岩 藤
田 本
美 真
理 子
穂 穂

問… 次のセリフを□内の動物にしゃべらせるとすると、どのセリフをどの動物にあてますか。

- A おれが知ってるぞ。
B わたしが知っているわ。
C ぼくが知っているよ。
D わしが知っておるぞ。
E おらが知ってるだ。

①	②	③	④	⑤
フクロウ	オオカミ	ブタ	イヌ	ウサギ

表一 動物と役割語の結びつき

①	②	③	④	⑤
フクロウ	オオカミ	ブタ	イヌ	ウサギ
A	B	C	D	E
0	0	2	2	1
3	67	0	1	5
66	61	5	2	2
66	61	5	2	2

多少のばらつきは認められるものの、たとえば⑤のウサギの場合、七一人中六人と九割以上がBの女性的な発話と結びつけている。いずれの動物についても特定の言葉づかいとの結びつきが強くなることがわかった。合わせて、それぞれの発話を選んだ理由の自由記述には、「①賢い、物知り、知識の象徴、長寿、長老、老人、②強そう、怖い、乱暴、肉食なので偉そう、一人で威張る、野性的、③おっとりしている、田舎者、愚鈍、まぬけ、「消去法」、④子供っぽい、かわいい少年、元氣、忠実、従順、素直、優しい、

無邪氣、いい子、「一般的」、⑤かわいい、女の子、弱そう、優しそう」といった回答が見られた。

調査した学生のうち多くは、オオカミは荒々しい男性、ウサギは可愛い女の子といったように、特定の動物に対して特定のキャラクターをイメージし、さらにそのキャラクターから思い浮かべられる言葉づかいを選択している。しかし、人間の役割語がステレオタイプ化される度合い（金水二〇〇三参照）に比べ、動物たちのイメージは必ずしも一定しているとは言えない。オオカミやウサギはそれぞれの動物元来のイメージが積極的な理由となって役割語が選択されていたが、ブタの場合は「この選択肢の中で選ぶなら」や「消去法」といった理由も見られ、オオカミやウサギほど特定のキャラクターと結びついていないわけではないことが伺える。実際、冒頭にあげた〈田舎ことば〉のブタは定着しているとは言いがたく、性別も男女どちらかに偏るということはない。

このように、擬人化された「もの言う動物」のことばのイメージは、人間のステレオタイプに比べ複雑な様相を呈している。では、「もの言う動物」のイメージ形成にはどのようなメカニズムが考えられるのか、またそれらの動物の言葉づかいのイメージはどうやってできてきたのか。本稿では、この二点を問題として議論を進める。

動物の擬人化はさまざまな面から論究されており、動物に特定のイメージが付与されることについては、次の三つの方向性がある。一つは教育・児童文学関係において動物が擬人化されること

の効果を論じるもの（久保村二〇一二など）、一つは認知言語学的観点からメタファー研究として論じるもの（岡二〇〇九など）、そして各動物のイメージを文化的背景や民族性と結びつけて論じるもの（濱田・李二〇一〇など）である。本稿は、動物が擬人化される際にイメージされるキャラクター性に注目する。さらに、そのキャラクターと結びつく役割語にも注意しながら考察していく。

二 キャラクター性付与のメカニズム

前節①～⑤にも挙げたように、それぞれ動物には特定のイメージがある程度存在している。しかしその一方で、一つの動物におけるキャラクター性や言葉づかいには差異もある。この差異はどのようにして生じるのか。本節では、「もの言う動物」のキャラクター形成のメカニズムについて考察する。

二・一 二重処理モデルとの関連

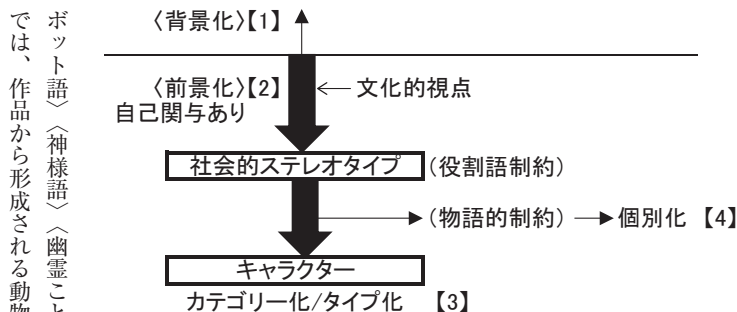
ここでは、対人処理に関するプリューワーの二重処理モデルを紹介し、物語上で描かれる動物のイメージに応用し、検討する。プリューワーは、対人情報の処理過程を、処理をしていることに気づかない自動的処理（automatic processing）の段階と、一定の判断が生じる統制処理（controlled processing）の段階という二重の認知段階が存在するとしている。これは、その特定の人物に対する自己関与の高さによって処理の段階が異なる。そして統

制処理の段階には、カテゴリーに基づく認知と個人に基づく認知とがあると考えている（上瀬二〇〇二、山本・原二〇〇六参照）。

二・二 二段階付与のメカニズム

さて、プリューワーの処理モデルは、物語に登場する動物に対する処理にも当てはまるところがある。まず、動物本来の姿が自然の一部として描かれる場合、物語上、舞台背景として自動的に処理される【1】。次に自己関与が高くなる場合、それぞれの動物のカテゴリー（個々の動物の性質や人間社会との関わり、自然界における力関係など）に基づき、タイプ化が進められ、前景化して描かれる【2】。このタイプ化には文化的視点が必ず含まれる^①。言葉はどのようなタイプ化を行ったかを表す一つの手法とも言える。この場合、タイプ化されたキャラクターにふさわしい役割語が社会的ステレオタイプとして選択される【3】。ただし、そこにはもちろん物語的制約も働く。たとえばどのような動物であっても、その物語の主人公であるときには（ヒーロー）としての言葉づかいが選択され、動物カテゴリーに付随する役割語はキャンセルされる。また家族構成が問題となる場合であれば、父・母・子といったカテゴリーが優先される。同種の動物による社会を描く場合も、同様の制約が働くと考えられる【4】。これらを踏まえたメカニズムを図式化すると図一のようになる。

「私たち一人一人が現実に対して持っている観念であり、いわば「仮想現実」（ヴァーチャル・リアリティ）」（金水二〇〇三参



図一 キャラクター二段階付与のメカニズム

照)であると考えられる役割語の知識において、擬人化された動物の言葉づかいに関するイメージ形成が人間のそれと大きく異なる点は、動物は現実には「もの言わない」ということである。ステレオタイプを固定・強化するような現実そのものがないため、反映されたり、影響を受けたりする言葉は現実世界にはない。そのため、ほとんどの場合、作品から形成されていくと言える。このような現実世界に対応がないものについて、金水編(二〇一四・xii)では他に、「宇宙人語」(ロボット語)〈神様語〉〈幽霊ことば〉などがあげられている。次節では、作品から形成される動物のキャラクターについて考察する。

三 現代における動物とそのキャラクター

三・一 資料・及び分析の観点

調査資料は、一九六〇～二〇一〇年の、擬人化された動物が登場しやすい絵本や児童書を中心とした⁽²⁾。また、動物のイメージは文化に影響される(吉川一九九五など)⁽³⁾ため、基本的に作者が日本人のものに限る。さらに、擬人化された動物が登場する話であっても、人間が動物に変身した話(例…ジブリ作品の『紅の豚』や、人間世界に動物が一匹(あるいは一種類)のみ登場する話(例…『長靴をはいた猫』)は省いた。理由は、前者が、もとの人間のキャラクターを強く反映していると考えられるためであり、後者は、物語的制約が大きく働き、作中での役割が優先され個別化されたキャラクターとなる場合が多いためである。

用例の分析は、特にキャラクター性のわかりやすい一人称、二人称、及び文末に注目する⁽³⁾。

三・二 一九六〇年代～二〇一〇年代

一五作品から六六の用例を収集した。内訳はウサギ一三例、狐八例、熊八例、狸・ブタ・リス四例、ネズミ・猿三例、モグラ・フクロウ・ライオン・象二例、猫・虎・亀・ビーバー・イタチ・スカンク・アライグマ・羊・ヤギ・鶏一例ずつである。このうち登場頻度上位のウサギ、狐、熊にどのような傾向があるか見ていく。まずは、ウサギの主な発話である。

(1) a ひどいわ。それなのに、こんどはきらいなんていうの。

いいわ、あたし、もうあそばさない。(ウーフ)

b だってわたし、ゴンちゃんがとぐちにてがみいれるのめちゃったの。(メリー)

c とうさんやかあさんがはなしていた冬がきたんだわ。わたし、さむいのだいきらい。(がつこう)

d ぼくも目なんかまわってない。(てがみ)

一人称に「わたし」「あたし」、二人称に「あなた」または「ちゃん」、文末には「(だ)わ」「の」などが現れる。このような一人称及び文末は「広く一般的な女性」「一般的に女性性を表す」(金水編二〇一四・六六「あたし」の項、同・一九九「わ」の項)、「自己主張しないつましい人物、相手に依存する弱い人物、周囲から守られる幼い人物を印象づける」(同・一五二「の」の項)とされる、典型的な〈女性語〉(中村二〇〇七、金水二〇〇七など参照)である。このような語を用いる可愛い女の子キャラクターが一三例中一〇例あり、「可愛い」「やさしい」という性格づけのある場合が多い。一方、(1d)のような一人称に「ぼく」を用いる三例のうち、たとえば、『森からのてがみ』に出てくるウサギは「かけっこ競争をする」というストーリーの中で登場する。これは、ウサギの「足が速い」という性質が前景化され「可愛さ」がおさえられタイプ化した例と考えることができる。

次に狐について見てみよう。狐の主な発話をあげる。

(2) a そんならウーフ、こたえてみる。ぼくのいうことにうま
くこたえられなかったら、このたまご、もらっちゃうか

らな。(ウーフ)

b いまに見ている、まめたのやつ。おれさまがどんなに
よいきつねか、おしえてやるからな。(へんしん)

c おれがむこうにいけなかったら、おまえのことをぜった
いてぶくろにしてやるからな。(スケート)

狐は、八例全て男性(男の子)である。注目されるのは八例中五例が「いじわる」「イタズラ好き」や厄介者、主人公を邪魔する悪者という役が与えられているところである。一人称は「ぼく」が四例、「おれ」が四例である。文末表現は「してやる」「からな」「しろ(命令形)」を多用する傾向にある。「おれ」の中でも特徴的なのは、「おれさま」という尊敬表現を用いる点である。「おれさま」は金水編(二〇一四)で「傲慢不遜で野卑な男性の一人称代名詞」(六六頁)とあるように、狐に与えられた「いじわるキャラ」を象徴する一人称である。複数の作品に通してこのような性質が与えられる動物は、狐の他はない。残り三例のうち二例は狐自身が物語の主人公となっている。

アンケート結果や児童書の用例から、ウサギの「可愛い女の子」や狐の「いじわるキャラ」といったイメージは一般に広く共有されている性質と見られる。しかしながら、実際の動物として持つ他の性質(「足が速い」など)に焦点が当てられれば男の子として登場したり、「主人公」という物語的制約がかかると「いじわるキャラ」とはなりにくかったりと、二節でみたように、擬人化される動物のキャラクターは、物語上の役割語制約や物語的

制約がより強く働く場合、比較的容易に変更されることが伺える。
最後に、熊についても見ておく。

(3) a いやだ。これはばくがいっしょうけんめいあつめたは

ちみつなんだもん。(トラゴロウ)

b そんならばくはみつばちになろう。そしたら、すごいぞ。
ばくのうちにはいつだってはちみつがいっぱいあるんだ。

(ウーフ)

c どうか、わたしのあしをみてください。いたくていたくて
たまらないんです。(おいしやさん)

熊は、八例全て男性(男の子)である。一人称は七例が「ばく」、一例「わたし」を用いている。熊は主人公であるなしに関わらず、取り立てて特徴のない標準的な話し方をする。性質にも際立った特徴はないが、どちらかといえば、可愛らしい、愛すべきキャラクターとして描かれることが多い。このような没個性的な表現は、いわゆる標準語を話すヒーローとしての役割語である(金水二〇〇七参照)。

四 基本イメージの歴史

三節で見たようなキャラクター性はいつ頃から定着してきたのだろうか。現代のように動物が役割語を用いるのは、人間世界の役割語が定着していることが前提となる。現在、役割語と捉えられるものの多くは、明治以降に定着したと考えられる(金水編二〇一四参照)。ため、役割語を用いる動物も、早くても明治以降に

しか存在しないはずである。そこで、明治から一九五〇年頃までの作品から用例を採取、三節で得られた傾向と比較し、いつ頃から現在のようなキャラクターが定着してきたのか、考察していく。

四・一 明治～一九五〇年頃までの実態

明治期において、作者が日本人であり擬人化された動物が登場する作品は極めて少ない。ここでは、巖谷小波『こがね丸』(一八九一年)と幸田露伴『宝の蔵』(一八九二年)を取り上げる。これらはいずれも文語調で書かれており、言葉の上では各動物に差は見られない。しかし、擬人化された動物には、動物ごとにキャラクターの差が見られる。『こがね丸』は、犬が主人公(黄金丸)である。虎が狐に唆されて、主人公の親を殺してしまい、その敵を主人公がとる、というストーリーである。ウサギは仙人のような医者であり、犬を助けるキャラクターとして登場し(用例(4)）、ヒロインとしての女性キャラクターはウサギではなく鼠である。

(4) 見れば耳長く毛は真白に、眼紅に光ありて、一目みるから尋常の兎とも覚えぬに。黄金丸は(中略)葉を賜はらんといふに、彼の翁心得て、まづその痕を打見やり、

(こがね丸)

『宝の蔵』は短編集であり、話ごとにやや動物のキャラクターが違ふものがあるが、狐はやはり知恵はあるが使い方を誤る(狡猾、愚か者)キャラクターで、ウサギは学者のために自らの命を

捧げようとするいじらしい姿で描かれるが、女性ではない。

次に大正から昭和三〇年頃までの用例として、一九作品から五二例を採取した。その内訳は、ウサギ一一例、熊八例、狐五例、狼四例、猿・猫各三例、犬・鹿・鶏各二例、ライオン他一二種が各一例となっている。現代との比較のため、ウサギ、狐、熊に注目してみる。まず、ウサギの主な発話をあげる（対象となる作品の年代が幅広いため、作品名の後に初出年をあげる）。

(5) a 僕はお団子がすきだよ。(しかへし一九一四)

b これは絵ですよ、お嬢さん。僕がこんど描いたのですよ。

(兎の画家一九三五)

c ほっちゃん、わたしもあとからついていくよ。心配いらんよ。(赤い玉一九四〇)

d わたしきつと山かじだと思っわ。(こわいわ)

(いつてみたら一九四七頃)

ウサギの例で注目されるのは、一一例のうち九例が男性(男の子)であることである。女の子のキャラクターとなっているのは一例のみで、この用例の中では最も新しい昭和二〇年以降の例である(残り一例は性別の判断ができないもの)。一人称は「ぼく」が六例、「わたし」が三例であり、文末には「(だ)よ」が多い。「可愛い」という特徴づけがなされたものは見られない。

狐は五例中四例が男性である。一人称は、「ぼく」が二例、「おれ」が二例となっている(一例は一人称が見られない)。

(6) a そんなら僕もつれて行つてくださいな。いいでせう?

(鶏と王様一九二三)

b よく考へてみるがよい。この木が伐られてしまつたら、それこそ子どもはどうなるか、一羽ものこらずおつこちて、どの子も僕に食べられる。(妙々車一九二七)

c へん。貴様ら三正ばかり食い殺してやつてもいいが、俺もけがでもするとつまらないや。おれはもつといい食べものがあるんだ。(貝の火一九三三)

d 山のむこうがあかるくてもくらくても、どうでもいいよ。ぼくはねむいんだよ。(いつてみたら一九四七頃)

(6 b c) のようにキャラクターとしては、二例に「狡賢い」という特徴づけがある。また(6 d)の例のように、主人公に対して冷淡な役となっているものが二例ある。

熊は、「ぼく」を用いる男性(男の子)が四例、(7 a)のように一人称は見られないものの発話内容から男性と推測されるものが三例、女性(女の子)の例が一例である。

(7) a おい猿公。何の唄だい。どこから聞いてきたんだい。

(お猿のしくじり一九二四)

b 逃げられちゃったぞ。しまつたな。かはりに何を食べようか。(狼・狐を食べようとする)(妙々車一九二七)

c こらおかみよせ。よさないときみをかみ殺すぞ。よわいのをいじめるな。うさぎみたいなちいさいのをいじめないで、ぼくをいじめてごらん。

(ほらあなのくま一九四七)

d ふゆごもり、しっている。ばくかあさんからきいている。

(お山の子ぐま一九五三)

現代の用例と比較すると、(7a-c)の波線部のように熊の強さ・凶暴性をクローズアップした、荒々しい表現が目立つ。

四・二 基本イメージ形成の背景

四・二・一 ウサギ

四・一で見てきたように、ウサギは、明治以降一九四〇年代頃までは男性(男の子)キャラクターで一定していたことがわかる。最も早い女の子キャラクターの登場は一九五〇年頃であり、戦後頃を境として、女性(女の子)キャラクターに転換したと推測される。戦前のキャラクターは、主に一人称「ばく」を用い、「知性」「柔らかさ」「弱弱しさ」を感じさせる。戦後の典型的な女性(女の子)キャラクターは、戦前までのイメージに加え「可愛らしさ」という特徴が強調されるようになったためと考えられる。ではなぜ、戦後、ウサギのキャラクターに「可愛らしさ」が強調されるようになったのか。

その一つの要因として、日本人とウサギの関わり方の変化があげられる。古典や昔話にも多く登場する古くからのウサギはいわゆる「野兎」である。ところが、明治期以降「飼兎」が登場し、第二次世界大戦頃には軍事目的のために小学校や農家で飼育が奨励され、一九四〇年代には飼育頭数が世界一になったという(濱田・李二〇一一)。つまり、戦争を境として、日本人が身近に接

するウサギは「野兎」から「飼兎」に変化したのである。

古来「野兎」は、狩猟の対象であり、豊穡や生命力の象徴として信仰の対象となる存在であった(赤田一九九七)。例えば、『古事記』に登場する有名な「因幡の白兎」は、鰐をだます「知性」を持ち、逆に騙され酷い目にあう「哀れな」存在でありつつ、大國主神に八上姫との結婚を予言するという「神聖さ」も持ち合わせる。このような古くからのウサギのイメージは、ウサギが医者である『こがね丸』⁴⁾や画家である(5b)の例などから、戦前頃まではある程度維持されていたものと考えられる。これに対し、戦後主流となる「飼兎」は慈しむべき対象である。「飼兎」には「知性」や「神聖さ」は必要ではなく、愛玩動物として「可愛さ」に特化した存在であることが求められた。

以上から一九四〇年代を境に、ウサギのイメージに「可愛らしさ」が強調されるようになった背景には、「野兎」から「飼兎」へという変化があったと考えられる。飼兎の「可愛らしさ」のイメージによって「可愛い女の子」キャラクターとして典型的な〈女性語〉⁵⁾があてはめられるようになったのだらう。

四・二・二 狐

狐のキャラクターは、明治期から現代に至るまでそれほど変化しておらず、狡猾やイタズラ好き、冷淡といったイメージで一定している。したがって、狐のイメージは少なくとも明治以前からできあがっていたと考えられる。

日本では古くから、狐は人を騙す存在として知られている。平安時代の『今昔物語集』などに既に、狐が人を騙す話が登場する。狐が前述のようなイメージを持っているのは、日本における伝統的な狐観の一つと捉えることができる。また、狡猾な狐のキャラクターは、日本の作品だけでなく、明治期以降、翻訳作品にも多く登場する。

(8) a なに葬式だ、葬式なら己^レがしてやる(鶏と雛のはなし)

b 「狐(心の中で)」汝(おまへ)の様な慾の深い者に夫れ位の事は当然だ。(中略)ア、い、気味だ。大食の狼め、とう／＼失せやがった(狼と狐の話)

〔明治期グリム童話翻訳集成〕より〕
さらに、狐はウサギなどと異なり家畜化されることがない。西欧のイメージの流入や、日本においても狐と人間の関わり方の変化による影響が少なく、「人を騙す動物」というイメージから狡猾・イタズラ者というキャラクターが明治期以降も用いられ続けたと考えることができる。

「おれ」を使用する狐は、日本の作品では昭和初期頃から見られるようになる(用例(6c))が、翻訳作品では明治末頃には既に用いられている(用例(8a))。明治以降、漢語由来の「よく」が知性や優しさなどを表象する一人称となっていく一方で、庶民に土着的に用いられていた「おれ」が、対照的に荒々しさや雄々しさを表象する一人称となっていく(金水編二〇一四)。そ

のようなコントラストを翻訳作品ではいち早くいじわるなキャラクターとしての狐の造形に活用している点が伺える。⁽⁷⁾

四・二・三 熊

現実世界での熊は、雑食ではあるものの、時に人間が襲われ命を落とすこともあるほどに、凶暴な恐るべき動物の一つである。似たような「凶暴な恐るべき」特徴を持つ動物であるライオンや虎、狼などは、多くの場合、肉食性や荒々しさ、雄々しさを強調したキャラクターとなる。それに対し、熊は(7ab)であげたように、昭和初期頃までは荒々しいイメージを持つ例が見られるものの、特に戦後はむしろ可愛らしい・優しいキャラクターが目立つ。この差異の要因の一つには、ライオンや虎がスリムな体型をしているのに対し、熊は毛が長く丸みを帯びた姿形をしていることが考えられる。すなわち、熊は凶暴性よりも見た目の特性がキャラクターとして優先されているということになる。また、テレビベアや『くまのプーさん』など海外からの影響も考えられよう。熊については、まだ十分な検証ができていないため、現象の指摘に留めておく。

五 今後の課題

動物のキャラクターには、文化や社会的背景が大きく反映する。今回は、そのようなキャラクター性付与の要因について十分に立ち入ることができていない。動物の擬人化自体は、古くからさま

さまざまな文献に見られる。中世頃には動物の習性や鳴き声を利用し、各動物の特徴づけをした例も見られる。次にあげる『十二類歌合絵巻』（二五世紀頃）は、広く流布した作品である。その中に登場する動物を見ると、蛇には身体的特徴を表す「長々し」、犬には鳴き声を表す「べうべう」といった言葉などがそれぞれのセリフに組み込まれている。

(9) a 長々しの問答や。【蛇、身体的特徴】

b これをただ、とらへ候はばや。【虎、掛詞】

c べうべうたる野城、ことに興を催して覚え候ふ。【犬、

鳴き声（習性）】

【十二類歌合絵巻】（『鳥獸戯語』翻刻より）

また、一六世紀の作品からは、東国方言を話す鼠の例が指摘されている（出雲二〇〇三）。

(10) a いかにややこともかさきにいていそけとも、はやこしかか、みてならないそ（「よね」〈頭上に水の桶を乗せて運んでいる〉の詞。五二一ぺ）

b をれらもいたの物の一たんもとるへいそ（「うをほうてうのやく人」の「二郎ひやうへ」〈まないたの上に魚をのせて切ろうとしている〉の詞。五二〇ぺ）

【鼠の草子絵巻】（『鼠の草子絵巻』出雲二〇〇三より）

『鼠の草子絵巻』では、主人公や上級家来もみな鼠であるが、東国方言は用いない。この例の東国方言は、「雑事に従事する使用人の詞に東国方言の要素が見られる」「東国方言を巧みに画中詞

に取り入れることによって、言葉の上で下層使用人階級らしさを表現している」（出雲二〇〇三・四三二・四三三）と指摘されるように、東国方言は下級を表す役割語、現代でいうところの〈田舎ことば〉の早い例として位置づけられる。ただし、すべての鼠が東国方言を用いるわけではないため、鼠自体に下級のイメージがあったのかどうかは判然としない。少なくとも近世以前にも特定の動物と特定のイメージとの結びつきはあったものと考えられる。古典作品を扱いつつ、古くからの動物観をふまえることも含め、今後、さらに大きな視点からの検討も必要となるだろう。

使用テキスト（※傍線は本文中で用いた省略表記を表す）

【明治～一九五〇年代】

『日本児童文学大系』一～三〇 ほるぷ出版

西条八十「モン公とトン公」一九二二年／秋田雨雀「鳩と鷺」一九

二二年／千葉省三「雌鶏と王様」一九二三年・「お猿のしくじり」「兎さんのしかへし」一九二四年／濱田廣介「妙々車」一九二七年・「兎

の画家と鶏のお嬢さん」一九三五年・「お山のこぐま」一九五三年／村

山簪子「かくれんぼ」一九二七年・「小ぐまさんのかんがへちがい」

一九二八年・「ライオンの大損」一九二九年・「いぬさんとねこさん」

一九三〇年・「ゾウトネズミ」一九三〇年／北川千代「森のおばさん」

一九三〇年／宮沢賢治「貝の火」一九三三年／石森延男「赤い玉」一

九四〇年／佐藤義美「ほらあなのくま」一九四七年・「いってみたら」

一九四七年頃？

【一九六〇～二〇一〇年代】

小沢正「目をさませトラゴロウ」一九六五年 ポプラ社

神沢利子『くまの子ウーフ』一九六九年 ポプラ社

村山桂子『もりのおいしゃさん』一九七〇年 あかね書房

『メリークリスマスでこんにちば!』一九九二年 フォア文

庫『ゴンのともだち』『ゴンと赤いえりまき』一九七三年、「メ

リークリスマスでこんにちば!」一九九二年

加古里子『きんいろきつねのきんたちやん』一九七一年 学習研究社

中川李枝子『おひさまはらっぱ』一九七七年 福音館

森山京『もりやまみやこ童話選』1 二〇〇九年 ポプラ社(「きい

ろいばけつ」一九八五年、「つりはしゆらゆら」一九八六年)

佐和夏子『へんしんタヌキのふしぎなちから』一九九二年 金の星社

きたむらえり『森がっこうができた』一九九五年 福音館書店

ゆもとかずみ『きつねのスケート』一九九八年 徳間書店

舟崎克彦『森からのてがみ』二〇〇六年 ポプラ社

柴野民三『山ねこホテル』二〇〇九年 ビリケン出版

小手鞠るい『ひつじ郵便局長のひみつ』二〇一四年 金の星社

【その他】

『鳥獣戯語』第三巻、網野善彦・大西廣・佐竹昭広編、福音館書店

『明治期グリム童話翻訳集成』一〜五巻、川戸道昭・榊原貴教編、

永文社

参考文献

赤田光男(一九九七)『ウサギの日本文化史』世界思想社

出雲朝子(二〇〇三)『中世末期における東国方言の位相―『鼠の草

子絵巻』の画中詞をめぐって―』『中世後期語論考』四一七・四三

六頁 翰林書房

岡良和(二〇〇九)『メタファーとコミュニケーション―発話行為論

から―』『こころとことば』八 二七・三六頁 人間環境大学

上瀬由美子(二〇〇二)『ステレオタイプの社会心理学―偏見の解消

に向けて―』セレクション社会心理学21 サイエンス社

金水敏(二〇〇三)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店

金水敏(二〇〇七)『近代日本マンガの言語』『役割語研究の地平』

(金水敏編) 九七一・〇七頁 小石お出版

金水敏編(二〇一四)『役割語 小辞典』研究社

久保村里正(二〇一二)『心的イメージの可視化プロセスと表現』『教

育学部紀要』四六 一三五・一五〇頁 文教大学教育学部

戸田有一(二〇〇一)『幼児の動物キャラクターに対するステロタイ

プの変容について―幼児のステロタイプへの接近のための予備的

研究―』『エデュケア』二二 三一一・三九頁 大阪教育大学幼児教

育学研究室

中村慎里(二〇〇一)『狐の日本史 近世・近代篇』日本エディター

スクール出版部

中村桃子(二〇〇七)『女ことば』はつくられる』ひつじ書房

濱田陽・李珣淑(二〇一一)『うさぎたちと日本の近現代―日本十二

支考(卯)生活文化篇―』『帝京大学文学部紀要』四二 一六九・

一八四頁 帝京大学

松村潔(二〇〇六)『日本人はなぜ狐を信仰するのか』講談社現代新

書

山本真理子・原奈津子(二〇〇六)『他者を知る―対人認知の心理学

―』セレクション社会心理学6 サイエンス社

吉川敏博(一九九五)『メタファーとしての動物―日本語と英語のイ

メージ・ギャップ―』『言語文化研究』六・四 一二三・四六頁 立

命館大学国際言語文化研究所

注

(1) ただし、この時点で、動物は擬人化されているとは限らない。

(2) 実際、先のアンケートにおいても、絵本やアニメ、映画などの

特定のキャラクターを理由としてあげる回答も見られた。例えば、オオカミであれば「赤ずきんちゃん」のオオカミ、ウサギであればサンリオの「マイメロディ」などのキャラクターである。

(3) 今回は動物のもつイメージとしてのキャラクターを問題とするため、〈動物語〉の中でもいわゆる「キャラ語尾」(キャラクターを特徴づける文末表現)(例・犬キャラ「そうだワン」、ウサギキャラ「そうだビヨン」)などは考察の対象とはしていない。

(4) 『こね丸』のウサギには、中国説話の嫦娥伝説に基づく月のウサギのイメージが反映されている可能性もある。

(5) 女性語成立の背景については、金水(二〇〇三)及び中村桃子氏の一連の研究(中村二〇〇七他)などを参照のこと。

(6) 「高陽川の狐、女と変じて馬の尻に乗りし話」(巻二七・第四一)など。

(7) また、興味深い点としては、『今昔物語集』のような古典、あるいは日本の昔話に登場する狐は、人に化ける時「女性」となる場合が多く、本来女性性との結びつきが強い(中村二〇〇一、松村二〇〇六など)という指摘がある。ただし今回調査した範囲では女性キャラクターが与えられた狐の例は見られなかった。明治期を境として、「女性」性から「男性」性へという転換があったのかもしれない。

(8) ほかにも、ユーモラスな熊として広く知られたものに、童謡「森のくまさん」がある。ただし、「森のくまさん」はもともとアメリカ民謡であり、日本で普及したのは一九七二年以降のことである。

(いわた・みほ 就実大学講師)
(ふじもと・まりこ 尾道市立大学講師)